

図書室月報

2022年(令和4年)8月5日

第711号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

三宅 岳著

『山に生きる』

— 失われゆく山暮らし、山仕事の記録 — を受講して



星 晴雄

『山に生きる』の著者で講師の三宅岳と私は、国立市の学校で中・高の同期だった。その縁から、彼がどんな活動をしているかということに関心があることを嬉しく思い、参加した。

始めに本の内容を簡単に紹介したい。

この本では、著者が取材した11の山仕事を読むことができる。グループに分けてみると、食に関わる山仕事(ゼンマイ折り、月山筍採り、山椒魚漁、阿波はん茶作り)、モノ作りに関する山仕事(大山独楽作り、立山かんじき作り)、木材の運搬(馬搬、手櫓遣い、木馬曳き)、そして漆掻き、炭焼きということになる。中でも炭焼きは、著者がこうした山仕事を記録するようになる原点でもあったそうである。

これらの山仕事について、写真家である著者は、仕事ぶりに肉薄する、迫力ある写真に収めている。取材の様子については、独特の語り口の、軽妙な文章にまとめられており、楽しく読むことができる。

読んでいて気づいたのは、山仕事に関する言葉は、町で暮らしている者にとっては新鮮だということ。たとえば「窯」という漢字に出会うと、これって「かま」のことだな、と確かめつつ読むことになる。「木馬」が「きんま」だというのも、この本によって知ることができた。ほかに「櫓(そり)」などもある。

本に登場する山仕事の主たちは、山仕事を黽に刻んだかのような、職人らしい外見である。被写体となった人たちの表情や体の動きぶりから、山

仕事を行う「人」の営みの深みが伝わってくる。さて、講演当日は、大学通りの桜も咲き始めるころ。

講師である三宅岳が用意したスライドを見ると、自己紹介のページには、懐かしい高校の卒業アルバム(表紙(国立駅の三角屋根の駅舎を望む、大学通りの絵)が登場し、講師と国立との縁が示されていた。こうして自著を語るために国立に招かれたことめぐり合わせを、講師は感慨深げに話してくれた。

講師が育ち、現在も住む神奈川県旧・藤野町(現在の相模原市緑区)は自然が残り、炭焼きという仕事も近所にあつたことなど、この『山に生きる』出版へと至る原点も聞くことができた。そして、著書の各章についての、取材時の体験談は大変興味深いものであった。山仕事という重労働に付き添ったの、やはり大変だったであろう取材の様子が想像でき、いわば本を読む際の「行間」のようなものが伝わってくる思いがした。もちろん行間ばかりではない。山仕事をやる人がどんな道具を使い、どんな場所でのように働いているのか、という実際の様子も、スライドの写真と著者自身の語りによって生々しく伝わってきた。

山仕事とはどんなものなのか、どんな人が山仕事をしているのか、少しでも興味があれば、ぜひ『山に生きる』を読んでみてほしい。また、この本が生まれるきっかけともなった『炭焼紀行』(創森社・2000年刊)もあわせてお勧めしたい。

(山と溪谷社)

ブッククラブから

金原ひとみ著 『持たざる者』

藤谷悠祐

果てもなく続くパンデミックに憂鬱と不安が常態化し、ぼんやりと先の見えない未来だけが広がる。いや、こうした傾向はパンデミック以後に限った話なのか、もっと他に起点があったらうかもわからぬまま、ただ倦怠の日々が続く。

『持たざる者』は東日本大震災とそれに伴う原発事故により、それまでの日常が切断された四人の男女を描いている。家族との離別、子と死別、地縁、己の家などの喪失による日常の切断。総じて、これまで自明であったはずの安住できる「居場所」の喪失を描いたといえるかもしれない。

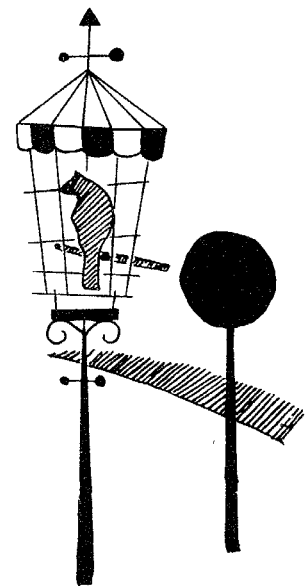
ただし、これらの喪失はいずれも原発事故による直接的な被害ではない。放射能による見えない恐怖、あるいは閉塞感や抑圧といった曖昧模糊としたものに追い詰められ、苦しめられたその結果である。問題の根を見出だしにくいだけに、シンプルな解決もまたつまみにくい。では、この憂鬱と倦怠の日々をわずかながらでも抜け出る糸口はあるのだろうか。

本作では様々な喪失に対する悩みが、リレー形式で繋がれていく。ただし、他者への強圧的な態度が悩み

の根にあったり、または捌け口を見出だせないことが己の抑圧となっていたり、どこか素直に共感出来ないところがある。彼/彼女らが少し変わった環境で暮らしていること、または生活の希薄さが、共感しにくさを強めているようにも感じる。少なくとも一人目の語り手修人については、ムカつくと感じる読者が多いのではないだろうか。

しかし、共感のしにくさもまた著者の狙いではないだろうか。愚痴はどこか安直な共感を欲せず、まして理にかなった返答も必要とせず、ただ吐き出されるところに意義を見出だせる。曖昧で雲をつかむような愚痴であっても、その吐露が日々の内なる痛みを緩和し、少しでも生活をリスタートさせる。

本作では誰もが共感を抱きやすい、シンプルでわかりやすい愚痴を発している者が一人だけいると思う。最後の語り手、朱里だ。赴任先のロンドンから東京に帰ってみれば、自宅は義兄夫婦に占拠されている。自分の部屋がない、汚い、腹が立つ、信じられない！愚痴が他の三人と異なり、極めて具体的にわかりやすい、共感出来る！



愚痴の数々はロンドンの夫に向けられるも、意に添う返事は得られない。結局、他者を自分のテリトリーからシャットアウトすることで、心の平安は保たれる。曖昧で共感しにくい愚痴がそれでも他者との関係を繋げるか、朱里のように共感しやすい愚痴が結果的に他者との関係を斥けるか。愚痴と共感をめぐる皮肉のようなねじれが、人間関係の不思議さをあらわすようで興味深い。

また、朱里だけがSNSでの繋がりを持たないところも示唆的である。彼女の悩みが一番明確で、SNSで吐き出しやすそうなものなのに。

東日本大震災以後、絆という言葉が広く叫ばれるようになった。明るいヒューマニズムを帯びた語こそ使うに心地よいが、その曖昧な中身はよくわからない。大きな物語は小さな視点を見失わせる。明るく大きな絆よりも、暗く小さな愚痴こそ欲したい。

『持たざる者』は希望とまとめるにはあまりに些細で陳腐かもしれない、愚痴の効用を多面的に謳っている。

(集英社文庫)

新着図書から

<p>〔総記〕 意識はなぜ生まれたか マイケル・グラツイアーノ (白揚社) 141</p> <p>〔歴史〕 日本近代社会史 松沢裕作 (有斐閣) 210 いのちと平和のバトンを 吉田裕 (合同出版) 210 国家に捏造される沖縄戦体験 石原昌家 (インパクト出版会) 219 ポル・ポトの悪夢 井上恭介 (論創社) 223 ブラジルの歴史を知るための50章 伊藤秋仁 (明石書店) 262 命のビザ評伝・杉原千畝 白石仁章 (ミネルヴァ書房) 289 ヘレン・ケラーの日記 ヘレン・ケラー (明石書店) 289</p> <p>〔社会科学〕 日本でわたしも考えた パーラヴィ・アイヤール (白水社) 302 人権と国家 筒井清輝 (岩波書店) 316 アメリカの奴隷解放と黒人 アイラ・パーリン (明石書店) 316 在日朝鮮人を生きたる 山本かほり (三一書房) 316 イラク戦争を知らない君たちへ イラク戦争の検証を求めるネットワーク (あけび書房) 319 「ヘイト」に抗するアメリカ史 兼子歩 (彩流社) 361 水平社運動の思い出 木村京太郎 (部落問題研究所) 361 共に在ること 水谷雅彦 (岩波書店) 361 テクノロジーと差別 宮下萌 (解放出版社) 361 共有地をつくる 平川克美 (ミシマ社) 365 韓国と日本の女性雇用と労働政策 裴海善 (明石書店) 366 告発と呼ばれるものの周辺で 小川たまか (亜紀書房) 367 〈トラブル〉としてのフェミニズム 藤高和輝 (青土社) 367 話すことを選んだ女性たち アナスタシア・ミコバ (日経ナショナルリジョグラフィック社) 367 東京大空襲の戦後史 栗原俊雄 (岩波書店) 369</p>	<p>ぼくはロヒンギャ難民。 小峯茂嗣 (合同出版) 369 子ども・若者ケアラーの声からはじまる 斎藤真緒 (クリエイツかもがわ) 369 マイホーム山古 末並俊司 (小学館) 369 福島人なき「復興」の10年 豊田直巳 (岩波書店) 369 フェンスとバリケード 三浦英之 (朝日新聞出版) 369 ケアと家族愛を問う 宮坂靖子 (青弓社) 369 鼎談なぜ子どもたちは生きづらいのか 天童荒太 (金剛出版) 371 よくわかる公民館のしごと 全国公民館連合会 (第一法規) 379 狙われた身体 安井眞奈美 (平凡社) 382 辺野古入門 熊本博之 (筑摩書房) 395</p> <p>〔自然科学〕 あした出会える野鳥100 柴田佳秀 (山と溪谷社) 488 八ヶ岳山麓―山小屋の愉しみ― 出井得正 (本の泉社) 488 近世感染症の生活史 鈴木則子 (吉川弘文館) 493 〔工業〕 生きつづける民家 中村琢己 (吉川弘文館) 521 〔言語〕 うまれることば、しぬことば 酒井順子 (集英社) 810 〔文学〕 大江健三郎と「晩年の仕事(レイト・ワーク)」 工藤庸子 (講談社) 910 川端康成と女たち 小谷野敦 (幻冬舎) 910 月曜日は水玉の大 恩田陸 (筑摩書房) 910 燕は戻ってこない 桐野夏生 (集英社) 910 センス・オブ・何だあ? 三宮麻由子 (福音館書店) 910 ミシンと金魚 永井みみ (集英社) 910 古本食堂 原田ひ香 (角川春樹事務所) 910 さつきまでは薔薇だったぼく 最果タヒ (小学館) 910 壁が崩れた後 國重裕 (郁文堂) 940</p>
---	---

一節

山本冴里編

『複数の言語で生きて死ぬ』



「境界」という言葉には、県境や国境の場合のように、一本の線で画すという印象が強いかもしれませんが。しかしこの本では境界を、可変的な幅を持つもの、ゆえに人がとどまりうるものとして描いています。広々とした道あるいは川のような場、と言えるかもしれませぬ。そこは異質なものが交錯し混ざりあい、溶けあい、新たな何かが生み出される(かもしれない)場です。場としての境界は、きりきりと張りつめた線としての境界に、時には追い詰められ時には拮抗しながら、世界中で立ち現れます。そう、この本のなかで描かれる具体的な地点は日本国内だけでなく、フィリピン、ブラジル、韓国、ドミニカ、シリア、フランス、ジンバブエ、パラオ、イギリス、タイ、デンマークなど多岐にわたり、私たちはこうしたさまざまな場所での人生の一瞬に立ちあうことになるのです。

日常のなかには、いくつもの言語や文化が重なり合う瞬間があります。

自らにとって異質な言語の学習は、時に人生を大きく変えていきます。

人は、社会や歴史と複雑に絡まりあう言語に束縛され翻弄されながらも、また言語によって道を探り拓いていきます。(くろしお出版)

図書室のしごと

日本の島をめぐる旅

—知られざる日本の離島の風景—

お話し 清水 浩史(書籍編集者、ライター)

長年海と島をめぐる旅を続け、島の様子やそこで暮らす人々の話を見聞きしてきた清水さん。住人がたった1人となった島、独自の風習が残る島など日本の小さな島を中心に、それぞれの島の移ろいや島に住む人たちの暮らしや思いについてお話いただきます。清水さんがこれまで訪れた島は簡単には辿り着けない島も少なくありませんが、物理的に行けなくても、遠くのことを思う気持ちを持ちつづけることが、広い意味で「行くこと」「旅すること」なのではないかと清水さんはおっしゃいます。ひととき、小さな島々へ思いを巡らせ、旅をする機会になればと思います。

〈清水さんの本〉『不思議な島旅』(朝日新聞出版)、

『秘島図鑑』『海駅図鑑』『幻島図鑑』『樂園図鑑』

(いずれも河出書房新社)、『深夜航路』

(草思社) ほか

とき 9月4日(日)

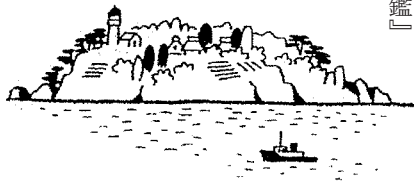
昼2時~4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込 8月10日(水)朝9時~

公民館 ☎(572)5141



〈私の本棚から 第5回〉

山崎美津江著

『帰りたいくなる家』

家の整理は

心の整理』



上原真弓

片付け術には流行があります。2010年の「断捨離」に「ときめき」、そして2015年には「ミニマリスト」という言葉が新語・流行語大賞の候補になりました。ネットには「こんなに捨てました!」「これだけの家財で暮らしています」という、分かりやすい写真が溢れています。

昔から片付けに興味があった私は、近年、片付けがエンターテインメントになっていることに疑問を感じていました。それに「こんなに捨てました!」の人はその写真を撮った後、その家の状態を継続できているのでしょうか?人に見せるための片付けのような気もして、違和感を感じてしまいます。暮らしの中で片付けとは、皆が思うよりもっと生活に根ざしていて、地味で、コツコツしたものであるはずです。

そんな中で見つけたのがこの本の著者である山崎美津江さんでした。彼女はNHKあさイチで「スーパー主婦」として活躍されていました。ですが、「スーパー主婦」という単語に似合わず、見た目はどこにでもいる普通のマダムなのです。この人のどこが「スーパー」なの?とつい思ってしまいました。片付けのことを話し出したら目が離せなくなりました。それは、地に足がついていて、

実際に長年自分の生活を整えてきた経験と理論が、言葉の端々に溢れていたからです。

山崎さんの文章にも派手さはありません。ですがその文章には、一時片付ければ良いという短期的なものではなく、今後の生活を支えていく、片付けという土台を作っていくという気を感じます。飾らず、そして実直なのです。

本著の終わりには、こんな短歌が掲載されています。引き出しをひとつきれいにしただけで、今日は良い日と素直に思う

この短歌は、10年ほど前に月刊誌「婦人之友」の中の「生活歌集」に投稿されていたものでした。山崎さんは、この短歌には小さいことに目を向ける大切さがつまっている、と言っています。

社会が不安定な中、無力感に襲われたりつい後ろ向きな気持ちになってしまふときがあります。引き出しをひとつ片付けるといふ一つの行動は、ただの地味な行動です。ですが、そうやって自分の手を動かして目の前の楽しみを見つけていくこと。そして片付いた引き出しを見て、「今日は良い日」と思えるような心の純粹さを大切にしていきたいと思いました。(婦人之友社)

係から

公民館では、「図書室のついで」でテーマになった本の他、その他の講座の参考図書も閲覧、貸出をしています。どうぞお気軽にご利用ください。

